



薬剤師
岩崎 祐子

子宮頸がんワクチンについて

暑い日が続きますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

今回は、日本国内で承認されている子宮頸がんワクチンについてお話しします。

子宮頸がんとは

子宮頸がんは、子宮の入り口部分(頸部)にできるがんです。日本では、年間約1万人が新たに子宮頸がんと診断され、約2800人が死亡しています。患者数も死亡者数も近年増加傾向にあり、特に20～30代の若い女性の患者さんが増加しています。

子宮頸がんは通常、早期にはほとんど自覚症状がありませんが、進行するにつれ、不正出血やおりものの異常(茶褐色、黒褐色のおりもの)、下腹部痛、腰痛、性交後出血などの症状があらわれます。

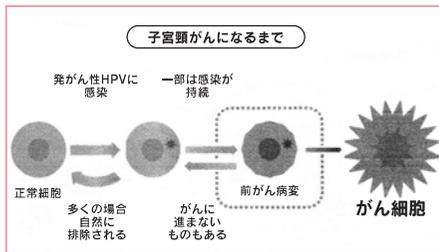
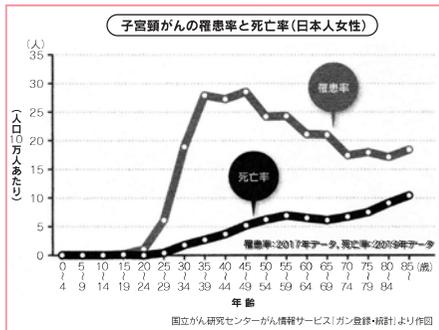
子宮頸がんの95%以上は、ヒトパピローマウイルス(HPV)というウイルスの感染が原因です。HPVは皮膚や粘膜に存在し、男性にも女性にも感染するごくありふれたウイルスで、生涯に80%以上の方がHPVに感染すると言われています。通常は、HPVに感染しても免疫の力でウイルスが自然に排除されますが、10%の人ではHPV感染が長期間持続します。このうち自然治癒しない一部の人は、異形成と呼ばれる前がん病変を経て、数年以上をかけて子宮頸がんへ進行します。

HPVは200種類以上の型があります。子宮頸がんの原因になる可能性のある高リスク型は15種類ほどで、中でも16型と18型は子宮頸がんの原因の約65%を占めています。皮膚や粘膜にできるイボ(尖圭コンジローマ)の原因となる低リスク型もあります。

高リスク型	16・18・31・33・35・39・45・51・52・56・58・59・66・68型など
低リスク型	6・11型など

子宮頸がんワクチンについて

HPVの中で、特に16型、18型は、前がん病変や子宮頸がんへ進行する頻度が高く、スピードも速いと言われています。しかし、これらの型への感染は、HPVワクチンによって防ぐことができます。



国内で承認されているHPVワクチンには、2価、4価、9価の3種類があります。

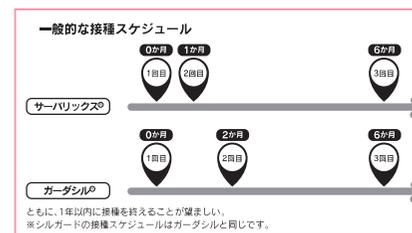
ワクチン名	価数	予防するHPVの型	費用
サーバリックス	2価	16・18型	無料:定期接種対象者(小学校6年～高校1年相当の女子) 自費:上記以外の10歳以上の女性
ガーダシル	4価	6・11・16・18型	無料:定期接種対象者(小学校6年～高校1年相当の女子) 自費:上記以外の9歳以上の男女
シルガード9	9価	6・11・16・18・31・33・45・52・58型	自費:9歳以上の女性

※ガーダシルのみ、9歳以上の男性への接種(自費)も承認されています。男性にも起こりうる、HPV感染によって引き起こされる肛門がんなどのがんや、尖圭コンジローマの予防になります。
※自費の料金は、医療機関によって異なりますので、お問い合わせください。

いずれのワクチンも、初めての性交渉を経験する前に接種することが最も効果的です。しかしHPVは、機会があれば繰り返し感染することもあるため、成人女性でも接種の意義はあると考えられています。ただし妊娠中は接種できませんので、3回の接種の途中で妊娠した場合は、出産後まで接種を延期する必要があります。

接種スケジュール

HPVワクチンは、3回接種することで十分な予防効果が得られるため、きちんと最後まで接種することが重要です。また、異なる種類のワクチンを交互接種した場合の有効性・安全性については十分なデータがないため、原則は同じワクチンで3回の接種を完了することとされています。定期接種対象者は、高校1年相当の3月までに3回の接種を終える必要があります。



副作用

一番多いのは、注射部位の一時的な痛み・腫れなどの局所症状です。通常は数日程度で治まります。その他、全身性の症状として、発熱、頭痛、疲労感や、吐き気・嘔吐・下痢などの消化器症状、筋肉痛、関節痛などがあります。気になる症状がある場合は、医師に相談して下さい。

キャッチアップ接種

HPVワクチンは、副反応(広範囲に広がる痛みや手足の動かしにくさ等)の報告により、2013年6月から、接種の積極的推奨は一時的に差し控えられていました。しかしその症状が、HPVワクチン接種後特有の症状ではないことが示されたため、2022年4月から積極的推奨を再開することとなりました。

その間、定期接種の対象であった方で、ワクチン(サーバリックス、ガーダシル)の公費での接種機会を逃した方に、改めて接種の機会が提供されています。1997年4月2日～2006年4月1日生まれの女性が対象で、2022年4月～2025年3月までの3年間の予定です。詳しくは、お住まいの自治体へお問い合わせ下さい。

定期的に子宮頸がん健診も受けましょう

ワクチン接種だけで、すべての子宮頸がんが予防できるわけではありません。また、すでに感染しているHPVを排除したり、すでに生じているHPV疾患の進行を遅らせたり、治療することもできません。20歳以上の女性は、2年に1回の頻度で子宮頸がん検診を受けることが推奨されています。定期的に検診を受け、異形成の段階での早期発見に努めましょう。

今回は、がんを防ぐことができるワクチンについてお話ししました。
なかなか婦人科には行きにくいと思いますが、ぜひお近くの産婦人科にご相談下さい。

参考:厚生労働省HPVワクチンリーフレット、グラクソ・スミスクライン資料